

岡山県《阿新地域》と聞いて位置や風景を即イメージできる人はちよつとした岡山通と言える、かもしれない。県の北西部、北は鳥取県、西は広島県に接する山間地域で昔の「備中国」。現在の新見市、平成の大合併前は阿哲郡大佐町、神郷町、哲多町、哲西町と新見市を指す地域名だった。

ここは、お膳立てされて、効率よく回る…という従来の「観光地」のような地域ではなかった。ゆえに受け身に旅をしてきた人には馴染みの薄い地域だったと思う。が、旅先が個人の価値観で選ばれ、作られるようになってきた。自分で考え、動く…つまり能動的に旅のできる人には大いなる魅力の地。好奇心がいろいろなところで頭をもたげてくる。自分はこの旅で何をしたいのか、何を感じたいのか、自分の「気持ち」と向き合える要素がいっぱいある。そんなエリアが阿新である。

たとえば自然。中国山地に育ま

れた川や高原、湿原、カルスト台地といった表情豊かな自然がある。そしてたとえば暮らし。そこに生きる人たちの智慧が創り上げてきた暮らしの文化が生きている。若山牧水や与謝野晶子、井伏鱒二等々、文学者たちを魅了した街道や集落も健在。味覚は山の幸、川の幸。加えて肉の芸術品といえる千屋牛。千屋は子牛で出荷する牛の生産地であり、肥育地ではないので神戸や松阪のように一般消費者に名を知られる機会が今まではなかったのだが、牛飼いの専門家ならよく知るブランド牛。神戸牛や松阪牛となつていく子牛の生まれ故郷がここなのである。近年、肥育する農家も登場しているのでもっとおいしい肉が食べられる。

山村の暮らしをなぞっている。日本が本来持っていた心づいて、こんな風だったのかも…とフツと思わせてもらえるときがあるのだが、この阿新もまさにそんな地域。ゆつくりと心の鎧が剥がれ落ちていくような不思議な安らぎが広がっていく感触を実感できる。

旅のルートは岡山市内へ備中高梁へ吹屋へ鯉ヶ窪湿原へ二本松峠へ神郷温泉へ千屋へ新庄村へ蒜山へ湯原温泉へ岡山。(新庄、蒜山、湯原は旧国名では美作国になる)。岡山、県北の心身リフレッシュゾーン一巡りである。

凛々しさ漂う備中高梁とベンガラ町の吹屋

天守閣は標高478mの臥牛山の標高430mにある。現存する城の中で日本一標高の高いところにある備中松山城。よくぞこんなところに建てたものである。高梁の町を見下ろす城の石垣の美しさは狂いなく巨石を積み上げた石工たちの技術の確かさ。城内に見る木組は大工の棟梁の経験の豊かさ。手斧や槍鉋で削った痕からは大工たちの呼吸さを感じる。驚く…は天守閣に囲炉裏。冬は寒かったのだろう。囲炉裏を囲みながら談笑する城番の家来衆の声は聞こえてくるようだ。天守閣や二重櫓などは昔のまま重文。本丸南御門など数棟は復元されたものだが、古図

～ 備中から美作へ ～

岡山県阿新地域の旅

清涼な空気を深呼吸



西本 椰枝

の石垣の豪壮さには圧倒される。さらに明治生まれの洋風建築の吹屋小学校は生徒が8人の現役小学校。日本最古の木造小学校だ。山間地では近年、学校の統廃合がすすめられる傾向にあるが、小学校を残すことも集落を存続させる要素の一つではないか。

ここに暮らす人は現在一三五人。そぞろ歩きを楽しむ観光客は年間およそ十四万二千人。京都などとは違う。日本がここにあり。

歌ころ湧きたつ湿原や峠

吹屋から本郷川の溪谷に沿って旧哲西町の鯉ヶ窪湿原に向かう。途中、旧哲多町には自生のスズランが群生するすずらんの園・おもつぼ湿原がある。花期は5月。

鯉ヶ窪湿原は標高550mの高原に広がる。江戸時代末、備中松山藩主の板倉氏が灌漑用に築造した池を中心におよそ300種類の湿原植物が見られる。日本固有植物はもちろん、日本が大陸と陸続きであったことを証明する満朝系植物のオグラセンノウ（花期は夏）や

ピッチユウフウロウ（花期は夏）など貴重な植物も自生。一周約2.4 km。あつちで立ち止まりこっちで深呼吸をして：約1時間。この標高での湿原としては大変珍しく、昭和54年に国の天然記念物に指定された。花は夏中心に咲くが、四季それぞれの表情が楽しめる。

鯉ヶ窪から車で15分ほど南西に走ると備中と備後の国境二本松峠である。「峠」とは決定を強いるところだとかかつて詩人真壁仁は歌ったが、ここは里の中の峠のせいかさほどに厳しく強いてくるものはない。ただ透明な郷愁がしみじみと充ちている。多くの旅人を見てきた道だ。その一人に若山牧水がいた。早稲田の学生だった明治40年の夏休み、有本芳水に勧められて歩いたという。そのときの歌が代表作

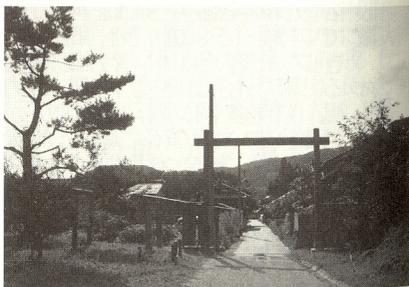
幾山河こえさりゆかば

さびしさのはてなむ国ぞ

けふも旅ゆく

とみられるが、鉄道の開通で道は寂れ茶屋も姿を消してしまっていた。が、昭和39年、牧水の歌碑が建立され、後に夫人と息子の歌碑も並んで建てられ、さらに平成6年には熊谷屋も再建。峠付近には二本ではないが、松が一本と番所跡の石垣も残り、牧水の歌ころを少し偲べるかも……

二本松峠から国道182号を北に向かつて神郷温泉を目指す。JR芸備線と中国自動車道がつかず離れずついでくる。途中、国道に沿う神代川の向こうに3基の大きな水



門の向こうは備後、門のこちらが備中 国境である



小堀遠州作庭の頼久寺庭園

に忠実に復元された堂々たる姿である。登城するには些かの体力、脚力、心臓も丈夫でないといけないが、それでも是非登りたい城だ。もちろん藩主がここで暮らしたわけではない。麓で暮らし、政務も麓で執った。山麓には松山藩主や岡山藩主ゆかりの城郭のような豪壮な寺々が並ぶ。道も狭い。一見して皆の役目を持っていたのだと分かる。その一角に小堀遠州作の庭のある頼久寺がある。静けさが地面を這っているように贅肉のない庭だ。

寺町の北に続く「石火矢ふるさと村」は武家屋敷が並んでいた町。僅か250mほどの道だが土塀や門に滲む格式が、辺りの空気を凛とさせている。そのうちの一軒旧折井家が「武家屋敷館」として公開されている。

この町はまた、高梁川を行き交う高瀬舟の中継地でもあったから町の川筋でも池上家（公開）のような豪商たちが高い文化を育んでいた。その旦那衆たちも舌鼓を打ったに違いない。高梁は鮎の町。カルスト台地から流れ来る高梁川の水はカルシウムが豊富。故に苔が美しい。故にそれを食べる高梁の鮎は美味だとか。

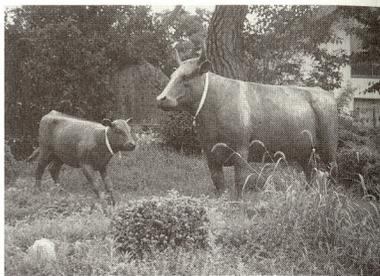
高梁から成羽川に沿い、さらにどこに行くのだろうと思うような山道を上り切ると突然の家並みが現れる。標高は500m。赤い石見瓦にベンガラ格子の家。空に電線はなく町並みに看板も幟もない。国の重要伝統的建造物群保存地区の吹屋である。江戸から大正にかけて銅山とベンガラで栄えた町だ。町全体も美しいが一軒一軒の家々



銅山経営とベンガラで材を築いた広兼邸 映画「ハッ墓村」のロケはここで行われた

の目立たないおしゃれ、控えめな贅が素晴らしく、昔の大工の棟梁の心意気を垣間見るおもしろい。ベンガラとは九谷焼や伊万里焼の絵付けなどに使われる赤色の顔料で防汚剤にもなるところから家屋の外壁などに塗っておくと家が長持ちする。吹屋の家並みが赤っぽいのはどの家もベンガラが塗ってあるからだ。町並みから少し離れるがベンガラの歴史や製造方法がわかるベンガラ館や笹畝坑道、銅山経営で財を築いた広兼邸や西江邸でも時間を費やしたい。特に広兼邸

動物場などもあり「家族旅行」にお勧めしたい施設であった。
 ところで千屋といえは千屋牛。千屋牛の生産をしている上田健吾さんにお話を聞いた。
 元々、中国山地のこの辺りは砂鉄がとれるのでタタラ製鉄が行われていたところ。牛はその荷物を運んだり農耕に使ったりしていた。江戸天保年間、大田辰五郎なる分限者がタタラで築いた財で、優秀な使役牛になるよう濃厚で粘り強い千屋牛の生産を始め、さらに牛市場も開設。千屋は和牛飼育の里



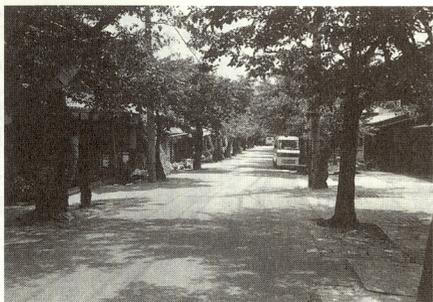
千屋集落の農協前にある千屋牛のブロンズ増

になっていった。肉牛として意識し始めたのは昭和40年代になってからだったという。牛肉の味は肥育の仕方もあるが、とにかく血統だという。殊に母牛の血統がモノをいうそうで、血統書をみれば、その牛のロースのサシの状態まで予想できるとか。このおいしい千屋牛を千屋でも食べられるように最近はお荷するだけでなく、肥育も手がけていて、いぶきの里の他、数軒で食べることができている。

備中国から美作の国へ

千屋から出雲街道を「メルヘンの里」新庄村に向かった。ここから美作国である。人口千人ほどだが、新庄村は平成の大合併で合併せず、独自で歩く道を選んでいる。

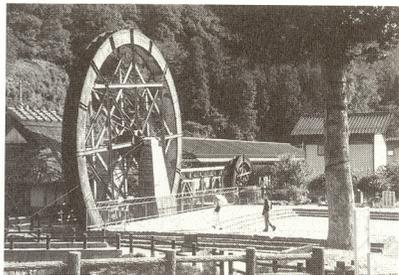
出雲街道は松江の殿様が参勤交代のときに使った道筋で、桜並木が美しい町の中ほどに本陣跡と脇本陣が残っている。時代を遡れば後鳥羽上皇や後醍醐天皇が隠岐に流されて行った道。桜は日露戦争勝利を祝って植えられたもので、400年ほどの宿場の町の両側で百



凱旋桜と呼ばれる桜並木のある出雲街道・新庄宿

年以上を経た137本が見事な桜並木に成長している。「凱旋桜」の名前の通り花が咲けば実に晴れやかだが、葉桜も、紅葉桜も、雪をかぶったときでさえ心に残る並木である。その並木の足下の水路を清らかな水が音をたてて流れていく。その中を鯉が泳ぎ、芋洗いの水車が回る。ここでは水が人の暮らしとともに「生きていく」。因みにこの音は「日本の音風景百選」に選ばれた「音」である。
 とここで、「メルヘンの里」の名

車。親子孫の水車で日本一だという。施設は「夢すき館」。ミツマタの産地で昔、紙すきが盛んだった。ここではハガキや色紙など簡単な紙すき体験ができる。



神代川沿いの神郷親子孫水車 (3代の水車では日本一とか)

両手いっぱい、自然からの贈り物

神郷温泉は国道182号から県道8号に入って北上してしまうので新見の市街地には入っていかないが、182号をそのまま東に行けばカルスト台地の中に見事な造形を見せる鍾乳洞の井倉洞、満奇洞

(満奇洞命名者は与謝野晶子鉄幹夫妻)がある。鍾乳洞の見学後、その上の標高400mの台地の草間集落まで足をのぼせば蕎麦好きには通り過ぎられない香りよし味よし歯ごたえよしの蕎麦に出あえる。十月中頃、草間は一面蕎麦の花。味とともに台地を埋める白い花の風景が素晴らしい。さらに北東に行けば「風の聖域」大佐。上昇気流が発生しやすい地形といい、ハングライダーやパラグライダー乗りの憧れの地。夜は満点の星。空、風、星、大宇宙を手中に収める贅沢を味わえる。

アウトドアというところをすれば、これから行こうとしている神郷温泉も「グリーンミュージアム」の呼び名に象徴される緑の中のリゾートエリア。高瀬湖畔のキャンプ場やコテージもサることながら、単純弱放射能の温泉が人気。いくらかヌルツとした湯は神経痛や筋肉痛、婦人病などにいいという。ここは宿泊もできるのだが、食事の素材は地ものの旬にこだわっている。珍しい食材の一つにキャビア

があった。「キャビアって？ あのカヤビア？」YES。チョウザメの卵を塩づけしたキャビアだ。何故ここでキャビア？ 新見市の漁協がチョウザメの飼育をしているのだそう。ここでは宿泊者一人一人の献立を必ず記録。次回にきて下さったときに同じ献立にならないようにするためのという。リピーターが多い施設だと聞いていたが、このような細かい配慮もあったのだ。人が旅の計画を立てるとき「どこかに行かない？」ではなく、「神郷温泉に行きましようよ」と《特定される地》であるために不断の努力がなされている地、施設にはやはり人は行くのだと実感。神郷温泉からさらに北東、あと2kmも行けば鳥取県という新千屋温泉「いぶきの里」にも足をのぼした。中国山地のまったた中。降雪量も多く冬は岡山や福山辺りからのスキー客も多い。温泉はアルカリ性単純泉で湧出量は264L/分。バリアフリー施設で車椅子のまま入浴できる風呂や愛犬同伴宿泊室も設置。オートキャンプ場や犬の運



蒜山高原の朝 冷たい大気中高原を歩く人

前の由来は村の象徴でもあるブナの森が広がる毛無山の中腹に杉の天然林がひろがっていて、その風景がヨーロッパの杉林の風貌と似ていることから夢と希望を持ち続ける里でありたい、と命名された愛称だという。

新庄宿から野土路川に沿って北に行くくと野土路峠の隧道。これを潜ると蒜山。この隧道ができて蒜山に行くのに随分便利になった。

西日本では珍しい広々とした高原風景を呈す蒜山は太古、蒜山の火山灰が湖に降り積もってできた

という高原。序でに言えば、その湖からあふれ出た水が岡山を代表する旭川を造ったのである。高原には上蒜山、中蒜山、下蒜山の蒜山三座を見晴らす「休暇村蒜山高原」を中心にジャージー牛の放牧場やひるぜんジャージーランド、蒜山高原ライディングパーク等々が点在。国道402号の南に行けば蒜山三座を一望する蒜山ハープガーデン等々も広がる。温泉も休暇村蒜山高原の温泉だけでなく、日帰り温泉快湯館があり、また日本名水百選の一つの塩釜の冷泉もわき出していて、とにかく数日間の滞在をしたい高原である。

蒜山から旭川に沿って下っていくと、旭川にかかる湯原ダムの下下に大露天風呂のある湯原温泉である。露天風呂の番付で西の横綱に選ばれている砂ふき湯は河床から毎分5800ℓを自噴するPH9.2のアルカリ性単純泉。川原を石で囲んだだけの湯船は長寿の湯、美人の湯、子宝の湯と三つ。自然のまんま。星を数え、カジカの声を聞く露天風呂だが混浴なので、ちよつと入りにくいヤ

という人は町の中ほどに共同浴場湯本温泉館がある。

湯原温泉には有効な温泉の入り方や温泉のエピソードなど愉快に語ってくれる「温泉指南役」なる人たちが50数人いらつしやる。

たとえば湯原温泉はアルカリ性が強いので石けんを使わずして肌がきれいになっていくとか、湯への入り方とか目からウロコの話も数々。指南役は宿屋の主人や土産物屋さんたちだが、温泉のことのみならず、近隣の情報も発信してくれる心強い存在だ。

湯原温泉郷にはこの湯原温泉の他、真賀温泉、郷祿温泉、足温泉、下湯原温泉の五つの温泉があるがどこも鄙びた湯治場風の雰囲気や大事にしているのがとてもいい。

この度の旅の締めは湯原温泉。プチホテルゆばらリゾート。ご主人古林伸美さんもちろん温泉指南役。愉快でタメニナル温泉説明を聞いて屋上露天風呂へ。備中、美作の旅を全部体に取り込むほどに大きく深く空気を吸い込む。空気がおいしい。